

2023 年度上野千鶴子基金助成金最終報告書【HP用】

1. 助成対象事業	「女性学・ジェンダー研究の発展に資する調査、研究、出版」
2. 事業の区分	一般プロジェクト
3. 氏名/団体名	神山 典子
4. 事業名	一時入所施設を利用した児童養護施設退所女性に対するジェンダーバイアスの解消に向けた支援モデルの開発
5. 助成額	
6. 事業実施期間	2023 年 9 月～2025 年 7 月
7. リンク	

8. 事業の目的

本事業の目的は、児童福祉法に準拠しない一時入所施設を利用した児童養護施設退所女性(以下、退所女性)を支援するために、ソーシャルワークに必要な支援モデルの開発を行うことである。退所女性が、児童養護施設退所後に、児童福祉法に準拠しない様々な支援機関から支援を受ける際、「施設退所女性であること」の特殊性を踏まえながら、ジェンダーバイアスの解消に向けた適切なソーシャルワークによる支援を享受できる社会の実現に寄与したいと考えている。なお、本事業による成果は、博士論文の一部として提出予定である。

9. 実施内容

はじめに、退所後支援を受けた後のアウトプットを明らかにした先行研究から、退所者が退所後支援に何を求めているかを明らかにする。つまり、系統立てた先行研究レビューによって、退所者自身の声を踏まえた今後の退所者支援の方向性の示唆を得たい。ここでは、退所女性の声の抽出も試みる。

次に、先行研究レビューを踏まえ、国内に複数存在する支援機関の中でも、一時入所施設つまり民間シェルターを対象とし、退所施設以外の機関による支援の充実を目指す。行政にはできない支援を遂行する民間シェルターには、多様な背景や生活課題のある女性が入所し、ソーシャルワーカー(以下、SWer)による「再出発」の自立支援が求められるためである。また、A 民間シェルターにおいて、SWer と退所女性の間で紡がれる相互作用を把握し、正確なデータを分析に反映させるため、フィールドワークを行う。そして、明らかとなった支援内容を基に、退所女性に必要な支援モデルの概念抽出を行う。

10. 事業の成果と自己評価

本事業の成果は 2 点あり、総じて事業計画をおおむね達成することができた。

1 点目は、退所後支援を受けた結果について、退所者自身がどのように評価しているかを国内の先行研究により明らかにした。論文は、『子どもと虐待ネグレクト 26 巻 2 号』に 2024 年 8 月「児童養護施設退所者による退所後支援の評価に関する文献研究—アウトプット調査の先行研究結果からの考察—」というタイトルで掲載となった。

文献は、CiNii Research およびスノーボールサンプリング法によって収集し、「①退所者支援と関連がない②学術論文でない③退所者に調査していない④アウトプットに関する記載なし⑤ IMRAD で記載な

し」を除外基準としたスクリーニングを経て、27 件を抽出した。対象文献の統合のために、文献概要と退所後支援の結果についてマトリックス方式を使用した。退所後支援の結果は、【支援を受けた結果】と【支援を受けなかった背景】に分け、支援元との関係性に着目しながら検討した。その結果、施設等だけではない支援元から多様な退所後支援を受けたことで、心の拠り所や未来への展望を獲得し、問題が解決したと評価している退所者の存在が確認できた。一方で、満足のいく支援を受けられず、支援を受ける意義が感じられなかったと評価している者もいた。また、多様な支援元から、支援を受けないという選択をせざるを得ない状況があることも確認できた。本研究の結果から、支援者に翻弄されぬような制度による改善と社会的問題としての正しい認識の普及、多様な支援機関を含めたソーシャルワーク実践の改善の必要性が明らかとなった。

2 点目は、民間シェルターを利用した児童養護施設退所女性に対する自立支援プロセスを明らかにし、抽出したカテゴリーについて支援モデルの可能性を提言した。分析結果は、2025 年 6 月の『日本子ども家庭福祉学会』にて、「民間シェルターを利用した児童養護施設退所女性への SWer による自立支援プロセス—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)による分析から—」として発表した。

A 民間シェルターで 2016 年 11 月～2024 年 10 月までフィールドワークを実施し、支援記録をもとに、M-GTA を用いて 15 世帯を分析した。分析焦点者を「A 民間シェルターに勤務する SWer」、分析テーマを「A 民間シェルターに入所した退所女性に対する SWer の自立支援プロセス」と設定した。その結果、34 概念 9 カテゴリーを生成し、「強制性」「操作性」が支援の中心にならぬよう、自己意識や利用者観、支援観を循環させながら、抑圧の再生産を極力避けるための自立支援プロセスが明らかとなった。退所者に対する意識的な思考を活用し、退所者というカテゴリーで特別視しない多様性の理解を踏まえた支援の専門性が確認できた。しかし、スタッフは、退所者に特別対応や存在価値のメッセージが必要と考え実践していたものの、退所者だけに特化し、これらを遂行していなかった。

最後に、抽出した 9 カテゴリー(【自己分析とシステム分析の中で交錯する個人と SWer の価値観】【協働して支援できる存在の重要性】【利用者の強みと課題の包括的理解】【繋がりに固執しないが連続性のある支援】【支援のもつ《強制性》《操作性》の自覚】【利用者主体のプロセスを踏んだ本音への接近】【カテゴリーで特別視しない個別支援と繋がり】【あらゆるバリアを取り除いた日常と対話】【生活に散りばめる存在価値のメッセージ】)について、民間シェルターを利用した退所女性に対する自立支援を促すソーシャルワーク実践モデルの可能性を提言した。なお、2 点目の研究成果については、論者のフィールドノーツを分析に加え、学会発表により指摘を受けた点を修正後、2025 年 7 月に論文を投稿した。

今後の研究課題として、2 年間の研究成果をもって正式な支援モデルの開発に至ったわけではないため、支援モデルの可能性を提言した 9 つのカテゴリーに対するブラッシュアップが必要と考える。

11. 成果物

- | | |
|---------------|-----|
| (1) 投稿論文 | 1 部 |
| (2) 学会発表関連資料 | |
| ア 全国大会プログラム | 1 部 |
| イ 抄録 | 1 部 |
| ウ プレゼンテーション資料 | 1 部 |